

混乱の現代（92・2・12）

長坂

強（昭14・文乙）

昭和十四年文乙の長坂 強でございます。この十二日会には、毎年、年のはじめの時点では、新年には、毎月、毎回出席しよう」と決意をするのですけれども、何となく、いつか、欠席が多くなりまして申し訳けないと思っております。先月の十二日会が終りましてから数日経ったところで、板倉大先輩から電話がかかりまして、

「長坂君、君みたいな元気のいいやつから、一つ話を聞こうじゃないかという声があるんだが、どうだい」

と、こういうことでして、

「ハア、おいでなすったな」

というわけで、板倉先輩から、

「まあ、あれだな、——長坂君、この様に混乱している時代だから、混乱の現代という様なテ

「マで、君、一発やらんかね」

と、いうことでございまして、

「ホー、混乱の現代、ウーン。」

すでに一回経験がございましてですね、板倉先輩のおっしゃることに反抗致しますと、

「やあ、長坂君、印刷に出しちゃったよ、君、この題で。」

と、こう来られるのですね。抵抗しても、とても無駄であると、

「はア……」。

心の中では、十二日会の大先輩のおっしゃることは、すべて天皇陛下の御命令と心得まして、承諾必謹でございまして、ということ、軽く、軽くじゃないんですが、ぐっといきたいんですが、言葉軽く、

「はア、もうおっしゃる通り致します」

と、いうことがありまして、それから、忘れもしませんが、一月、先月の二十六日、日曜日の午後四時頃、私が、あるところから家へ帰って参りましたら、また、電話がジャンと鳴りまして、出ましたら、また、板倉大先輩が、

「テーマはどうするかね」

とおっしゃる。私は心のなかで、すぐ、

「いやア、もう先だって、おっしゃった様に、『混乱の現代』あのお言葉を伺ってから、私の頭は、もうものすごく混乱しておりますけれども、混乱の現代、ということでもいいと思います。」と呟いております。

まあ、大先輩のおっしゃる意味はですね、

「先日、あ、は言つといたが、長坂、また、人間が真面目だから、いろいろ悩んで、こういう題名にしてみらいたい、などという希望があつてもよろしいし、どんな具合かな」

という、先輩としてのご配慮充分なものを感じたわけでございますが、

「いやー、先輩、もう、せんだって、おっしゃった様に、頭は混乱しつゝも、混乱の現代という題ですね、お引き受け致し度うございます。」

「オ、よろしい。それじゃあ、万事、よろしく頼むよ。」

というわけで、先輩というものは、相当なご配慮は頂くものの、誠に気楽な、一面では気楽なものであるが、後輩は、誠につらいものであるア、ということ、今度、往復ハガキが参りまして、題名を見ましたら「混乱の世界」ということでございましたが、最初から、お引き受けしました様に「混乱の現代」というテーマでお話させて頂きます。なぜ、混乱の世界ではなくて、混乱の現代であるかという、それは、この私の、つたないお話を聞き終りますと、あゝ、なる程、混乱の世界ではなくて、混乱の現代であるアということが、ご諒解頂けると思います。

そこで、概ね、先月のお電話が一回ある頃、二回ある頃からですね、いろいろ悪戦苦闘、いわゆる勉強致しまして、こんなに一冊のファイルが出来ておりますんで、どんなお話でも出来るわけでございますけれど、とにかくこういうことになりました。

そこですね、混乱の現代、さて、混乱とは、どういうことか、という様なお話からしなくちやいかんのかなと思いましたら、丁度、その一月の二十六日、板倉先輩からの電話が終了したのが、概ね、四時でしたけれども、NHKテレビですね、モンゴルは大混乱であるというテレビがございました。見ておりますと、やはり、これも、価格自由制を一月三日に施行してですね。そして、インフレ、物資不足、そして、私有財産制の移行という様なことで、経済不安その他で、大変な混乱に陥っております。それで、今まで、国営の販売店をですね、民営に移すということ、そこである権利書みたいなチケットみたいなものが、各国民にわたっておつてですね、それを使って私有財産に切り替えるという。その国営の販売店の今までの経営者と、そこに働いている従業員側とが対立してですね、従業員側は自分達の店を持ちたい、経営者側は、おれのを引きついでやりたいということなんですが、競争入札があつて、その従業員側が、勝った、目出度し目出度しということ。そして、そこで大統領が出て来てですね。いろいろな難しいことはあるが、これからは、香港その他の外国資本を導入して、大いに安定化を計っていききたいのだという大統領のお話がありました。ハハーン、混乱とは、こういうことかということ、混乱とは何

ぞやというのは、その様な意味にご了解を頂いて、先に進みたいと思います。

一九八九年でございました。十一月、東独ベルリンの壁が崩壊して、それから、どつと人が東ドイツから西ドイツへ行く。その他へ行く。から始まってですね、とうとう昨年(一九九〇年)の十二月末には、驚くなかれ、七十余年続きましたソビエト連邦というのが、崩壊してですね。そして共産党というものが解体した。約二年間、ものすごいスピードで世界は、まさに激動の中にあっても混乱、混乱というものは、やはりあるわけがございますね。激動の中に混乱あり、混乱しつつ、激動しているというのが実情でございます。私が一番印象的でございますのは、革命の火ともいうような、政治体制変革の動きが、いわゆる東側、東欧諸国に、順次、飛び火をして、というよりは、むしろ、同時・多発的に爆発をして、現在もなお、しきりに燃えさかっている、このような情景、情況であります。どこの国をとり上げても、興味深い点と申しますか、申し上げたい事柄はいくつもある訳でございます。従って、細かいデータを申し上げている時間は、ほとんどございませんので、どんどんお話を大づかみに進めて行かせて頂くことにいたしますが、まず、ルーマニア。

ルーマニアのチャウシェスク大統領、かれは、一九八九年の十二月二十日に、国へ、ルーマニアへ帰って来たんですね。というのは、十七日はどこへ行っていたかという、イスラエル、十八日からイランを訪問して二十日に帰って来た。国内では暴動が起っていると。そこで、非常事態

を宣言して、デモの鎮圧を計ったのですが、それが二十日ですけど、国防軍が、大衆に賛成をして、その結果、身の危険を感じて、二十二日、チャウシエスク大統領は、夫人が第一副首相ですけど、それを連れてブカレストからヘルクトまで脱出を計った。ところが二十二日に、そのブカレスト近郊で捕えられてしまう。ということなので、つまり、わずか三日で、二十四年間続いたチャウシエスク政権というものは崩壊する。そして、二十二日に逮捕されたんですが、二十五日には、もう特別軍事法廷ですね、五つの罪があると、国民の大虐殺、国家転覆の罪、それから、公共財産の横領、国民経済の破壊、逃亡の企てということが、ということ、銃殺されるということになるわけですが、死刑を宣告されて。この死後、判明することですが、チャウシエスク大統領の邸は、大変に立派であって、あたかも王宮の如くであつたと。従つて、大統領夫妻の豪華な生活が偲ばれるということでもあり、又、その後の、約二年経つた今ですけれども、政治犯の大量逮捕、大量の投獄、そして、彼等に対する人権無視の取り扱い、という風なことが、明るみにどうか、判明して来る。こういうことで二十四年間続いた政権が、わずか三日なり五日で崩壊する、という様な混乱は、一体どこから来るんだらうか。こういうことを、まず考えなければいかんと思います。その時に、チャウシエスク大統領は、二十五日、死刑直前ですね、人々に向つて何を言つたかと言つて「わしは、君らにこの様な仕打ちを受ける覚えはない」と言つたんですね。しかし、覚えはあつたか、なかつたか知らんが、やつちまえというんで、やつち

やったわけですね、一応の法的手続きはとって。そこで私は、思い出すのでございますが、これに関連して、三つ申し上げたいと思います。フランス革命の時に、王妃マリー・アントワネット、美女マリー・アントワネットはですね、王宮に押し寄せて来る群集を見て、傍らの侍女に何と言ったか「あの人々は一体、何をしているのですか」と聞いたわけですね。侍女は言ったんです「あの人達は、パンがないと言って、さわいでいるんですよ」。そこで、マリー・アントワネットは、何と言ったか。「パンが欲しければ、パン屋へ行けばいいではありませんか」、こういうことですね。そういう様な、つまり人心の動向は、どうして把握することが出来ないのか。人心の把握をすることが出来ない為にですね、美しい王妃、マリー・アントワネットも、また断頭台の露と消えたわけでございます。そいつを、先ず思い出しました。

私はさっき、とばした所なんです、実は、板倉先輩からお電話があつた時に、私は、ゆっくりなくとも思い出したことばはですね、

「隠れたるより、あらわるるはなく、微（かす）かなるより、あきらかなるはなし」という言葉ですね。

私は、もう、板倉先輩、実は、貴方が私を指名して来られるであろうということは、うすうす予知してましたよ、という風なこと。それは、どういうことかと申しますとね。私は、実は、二回、三回、最近の十二日会に来ておりましてですね、どうも私の所へ、板倉先輩が、指名したが

る気配があると。隠れたるより、現わるるはなく、かすかなるよりあきらかなるはなしということばですね。これは、大先輩を前にして、あれでございますけれど、三高の時に教わったわけですね。今、今日この言葉を用いるのは、その原典、古典にある、それは自分の内心のことを言っているわけですが、私は、今日は外界の事象に対しても、そのことは言えると思って、この言葉を用いさせていただくわけです。板倉先輩が、先ず第一の兆候は、先々月、この十二日会で、翌月のゲストを誰にするか、そのゲストを指名する時ですね、東京都の問題という時に、私は、たまたまいたんですよ。そしたら、この次は、一つ、長坂君か山中君か、とにかく、東京都の問題をやってもらいたいとおっしゃるので、私は、スラッと身をかわして、「ああ、東京都のことならば、山中重男君だ」というわけで、彼の所に落雷したわけです。それから、中村さんが欠席されたというか、ご都合の悪かった時に「おお、長坂、旗振れ」ということです、二回あったわけですね。私は、まあ、解説づきでやったんですが、段々私の所へ雷が近寄って来るナ、だから、その指名があった時は、そんなに驚かなかったんですよ私は。困ったなとは思ったわけです。その、そういう、為政者とか、リーダーとか、社長とか、部長とか、長の名前のついた人達は、部下の心情、その他、外界の事情というものを的確に判断していかないと的確な行動が出来ないわけですから、そういうものを、完全にピタピタとやってなきやいかん。そういうですね、まず、板倉先輩の電話のあった時に思い出したことばと同様に、このチャウシェスク大統領

がですね、なぜ四日、五日で、その政權が倒され、そして死刑・銃殺にされるか、そういう捕われの身となるなどということについてはですね、幾つかの事前の余兆があるわけですから、そういうものを的確に判断していけばですね。それから、もっと数年前からやっておれば、そういうことにはならなかったであろうというのが二番目。

それから三番目にはですね、これは、少し古い話ですが、隠れたるよりは、あらわるるはなしと同じですが、ここで、三高の漢学の話などをしては申し訳ないのかも知れませんが、どうして長坂は、そんなことを知ってるんだということになりますと、私は、第三高等学校の漢学というものは、大変レベルの高かったものなんだと、今になって思うわけです。重沢俊郎先生にですね、同窓会でお会いした時に申し上げたんですが、私は、三高で漢学を教えて頂いてよかったと先輩、ご承知の様に、大体、孝経こうきやうから始まって、四書五経、十八史略、史略、それから、老子その他、詩経にまで行くわけですから、私どもは、大して勉強したわけじゃないけど、青年時代のそれが頭に残っていますね。そういうことで自然とことなく、チャウシェスク大統領が、そういう目に遭った時に、その状況を聞き知った私どもの心のなかに浮んで来るものがございます。このとき、もう一つ浮んで来たことは、昔のシナの国、唐という国の太宗という君主・王様とその部下、名臣との一つの問答、やりとりであります。

従来、ひとくちに唐朝三百年、七世紀、八世紀、九世紀、および、十世紀初頭に及ぶ、といった

して参りましたが、本日のお話のために、予め、試みに年表を繰ってみますと、西暦六一九年から九〇七年まで、正確には二百八十八年間存続したことを知るのであります。都は、寮歌にもしきりに登場する長安でありますが、中国史上、政治・文化が一大発展を遂げまして、そのなかには、律令制度も整備されるという事象もごさいます。当時世界最強の文明国である、とされて参りました。

その当時は、日本の何時ごろ、どの時代に相当するか、と申しますと、唐王朝の始まる六一九年というのは、推古天皇、聖德太子、蘇我の馬子の時代。その終期、九〇七年のころは、醍醐天皇の御代でありまして、菅原道真公が太宰権帥に左遷されたのが、九〇一年、紀貫之たちが「古今和歌集」を作ったのが九〇五年。年表の示すところによって、このように私たちは知ることができる。なるほど、唐王朝は、すこぶる長いのだな。

いや、長期存続という面よりは、その雄大な世界的帝国であること、広く外来文化を摂取同化して、国際的綜合文化を形成してゆく一大文明国であること、これらを強調しなければならぬであります。

この間、わが方の朝廷からは、何回も遣唐使が派遣され、僧侶、学者、役人などの留学生が送られる。先進国である唐から、ハード、ソフト両面の文物の輸入をはかり、制度、学問、芸術、等々、文化の向上に努めてゆくのであります。七〇一年に完成をみた大宝の律令は、このような

努力の成果を示す適例でありましょう。

このように、唐は、すこぶる長期にわたって、繁栄し、世界最強の文明国である実を示すのでありますが、その基礎を築いたのが、高祖の後を継いだ太宗の治世二十四年。この太宗という人物は、明治天皇と昭和天皇の偉大さ、偉大な政治性というものを想い浮べ、これになぞらえてみられてもよろしいでしょうし、信長、秀吉、家康、それに、吉田茂などのいいところだけを抽出して、合成したような、たいへん傑出した人物である、と申し上げれば、手っ取り早くお解り頂けるのじゃないか。戦略、戦術に長じた戦（いくさ）上手、戦えば必ず勝つ卓越した軍司令官であり、隋末、各地の群雄を征伐するのに、父の高祖を援けて、これらをバシバシと平定してしまふ。これによって、父（高祖）が帝位に即くことを可能にするというような、赫々（かつかく）たる武功をあげる。かと思うと、唐王朝が開かれて、平和時に入ると、すぐれた政治・行政の手腕を発揮して、治世よろしきを得る、と、まあ、こういう具合で、彼、太宗の在位二十四年の治世を、彼の時代の年号をそのまま採って、世に、貞観（じょうかん）の治と称しまして、後世、今日に至るまで、政治・治世の範としている、と、まあ、こういう具合なのであります。

その太宗が、貞観二年といえますから、彼が高祖の後を継いで即位した次の年に、いさめる大夫（たいふ）というのですが、所謂、ご意見番ですね。そういう官職、——諫議大夫（かんぎたいふ）という官職が、ちゃんと設けてあるわけですが——、その諫議大夫、魏徵（ぎちやう）と

いう人に聞いた。

「何をか謂（い）いて、明君、暗君となす」と。

こう聞いたんですね。その明君というのと、暗君というのと、まあ、チャウシエスク大統領と
いうのは、殺されてしまえば、暗君なんでしょうね、やっぱり。それと、明君とは、どこに差が
あるのか。こういう風にすでに約千三百年ばかり昔に、唐の太宗が、いさめるご意見番、魏徴に
聞いている。序でにここで申し上げておきますと、この魏徴という人物は、終戦時の首相、鈴木
貫太郎の忠誠と、戦後の臣、茂——吉田茂の見識と政略とを併せ備えたような人物である、と
ご理解頂ければ、大きな間違いはありません。この魏徴は答えて言った。

「君の明らかなる所以のものは、兼聴すればなり」

「けんちよう」の「けん」は、兼ねるといふ字の兼、「ちよう」は聴く。兼聴すればなり。

「その暗き所以のものは、偏信すればなり」

偏って信じるですね。

ですから、君主が明君であるか、暗君であるか、の差は、どこから来るか。何ということはないんだ、と。多くの人々から意見を聴いて、それに耳を傾けるということが大事なんだ、と。暗君になるといふのは、偏信すればなり、つまり、一方的な意見だけを聞いていたんでは、判断が間違つて、大衆の心を失うよ、と言つたんですね。

「人君、兼ね聴きて、下を納（い）るれば」

つまり、広く聴いて、ですね、複数のものを、多数の意見を聴いて、下の言うことを容るれば、

「則ち、貴臣、擁蔽（ようへい）するを得ずして、……」

つまり、中間にある司、司の人々は、ふさいだり、蔽（か）つておいたりすることができなくて、

「下情、必ず、上通するを得るなり」

という風に、魏徴は答えているんですね。これがなかったんじゃないか、チャウシエスクには。人君、兼ね聴いて、人を納る、これがチャウシエスクにはなかったんじゃないか。ここに問題のポイントがある。このように見えて来るのであります。

.....

以上に関連して、もう一つ、お話し上げたいと存じますが、少し遠いところから、お話を進めさせて頂きます。

以上のことを踏まえまして、先刻お話し申し上げましたように、三高の漢学は、中国の主要な古典、その主要なエッセンスに相当するものを殆ど網羅するほどの広い範囲に及んでいること、その質的なレベルが高かったことなどから、たいへんに素晴らしいものであり、いまにして、三高でこれらを教えて頂き、学ばせて頂いたことを、まことに有難いことと感じ入っておるのでございまして、私は、ある会合の席上、そういうことを、実は、重沢俊郎先生に申し上げてですね、

お礼を申し上げましたら、重沢先生は、「長坂君、君は良かったネ」と、おっしゃる訳ですよ。「君はネ、漢学のすくよく出来る生徒でしたよ」と、おっしゃるのですよ。ヤヤー、これはもう大変。そこで、さらに勇を鼓して申し上げました。

「重沢先生、こんなことを申し上げては、元の生徒の分（ぶん）からは、失礼にわたることとなりかねませんので、お許し頂きたいのですが、重沢先生がある学期の試験に出された問題が、素晴らしい内容の問題でありまして、その素晴らしい故に、今日でも、それを記憶させて頂いております」

こんな話をしてて、時間が足りなくなるか、と思いますが。試験の問題の出し方が良かった、それで、それを記憶いたしております、と。

「長坂君、どうかね」重沢先生は、こうおっしゃいました。そこで、当時の事情をご説明申し上げます。

試験問題、即、答案用紙ですが、その第一行に次のように記されているのです。

第一問 文王之道如何

もちろん、「文王の道、いかん」と読みます。たった一行書いてあるだけです。あとは、用紙の半分ぐらい、充分に余白をとって、さあ、解答文をお書きなさい、いくら長く書こうとも、充分スペースはありますよ、こうおっしゃっているような、問題の掲げ方、余白のとり方なのです。

アト、後半は、チヨロチヨロ、チヨロチヨロじゃないけど、多少の問題を掲げて、点数のことをいうと品が落ちますが、この第一問への配点は、五十点だ、という姿勢を見せておられるわけですね。

僕は、人間が真面目なものですから、ここの習った所の、この、わからない所は何だ——などと思って、字引なんか引いていくでしょ。そんなのは、試験問題の大部分はいらないんですね。「文王の道、如何」というわけですね。文王とは何びとであるか、文王とは例の周という国ですね、紀元前一千五十年から、前二百五十年位まで続いた、非常な大国であります、その周の国の基礎を作った王様であって、いろいろな戦乱の模様ありますが、とにかく、その人物、政治は儒家の模範とされる。生没年不詳ということでございます。

さあ、そこで書きました、書きました。その第一問の解答文を、です。優れた問題を出して頂いたことから来る感激を冒頭に書きました。書き得るスペースの概ね半分を埋めて仕舞い、残りの半分を用いて、文王の道とはこういうものであって、後世の範とされている所以のところを詳述いたしました。もちろん、これにより、この時、よいお点を頂戴いたしましたことは言うまでもありません。

——まことに、めでたし、めでたし、ということですが、こういうお話を申し上げている人間の方も、また、少しめでたい、のではないか、——大方、聞いておられる方々もこんな感

じをうすすもたれるところかも知れませんが、そこで、こういう人間のめでたさを露呈してまで、何を申し上げたいか、と申しますと、ここに三高の漢学の指導方針、教育方針というようなものの一端が現われているのではないか、こう思われ、これを申し上げたいのであります。漢学を学習する生徒たちよ、学習をして、訓話解釈の学に止めること勿れ、古典の内容を把握せよ、古典のもつ思想を握め。そこに人類の知恵がある。それは古人の貴重な遺産である。——このような教育方針というようなものが背後にあつて、無言のうちに、これに基づいて「文王之道如何」というが如き、まことに含蓄のある試験問題となつて現れて来る、——このように思われて来るのであります。

それで、よくありますね、江戸の川柳に。「釣れますか、などと文王、そばに寄り」というわけで、太公望という人がございますね。太公というのは、文王のお父様で、その太公が、この人物ならば、必ず、政治のコンサルタント、宰相として用うるのに、最も優れた人物であるから、ということとで文王に「お前、あれを一つ政府に迎えろ」というわけですね。そこで、文王は三顧の礼を以てお迎えに赴くわけですが、太公望は、釣をやっておつてですね、なかなか言うことを聞かない、そこで江戸川柳は、文王が腰を低くして「釣れますか、などと言つてアプローチしたと、こういうわけなんです。太公望という名前も、太公が望んだ人という意味。そういう故事があるんですが。こんな話をしてたら、すぐ時間がたつてしまします。

そういうことで、

「何をか謂いて、明君、暗君となす」

と、ぴしつと尋ねた。これが、私のお話のグランド・ベースになるわけでございます。

混乱の現代、これは、東独のベルリンの壁の崩壊から、昨年の暮まで、あるいは今まで、ずっと続いている混乱の事象を、いちいちトレースしたんでは、四十五分、五十分の時間は、忽ち過ぎて、長坂、あれは何を言ったのか、わからんじやないかということになってはいけませんので、ここで強調しておきますのは、これがベースでございます。

よき治世、よき政治というものは、周の文王、唐の太宗の場合に見られるように、名君——才徳兼備の卓越した指導者によって実現される。

そして、文王には太公望、太宗には魏徴たち。名臣がその君主を補佐する。

さあ、そこで、鶏が先か、卵が先か。

「何をか謂いて、明君、暗君となす。」

「君の明らかなる所以のものは、兼聴すればなり。」

「その暗き所以のものは、偏信すればなり。」

人君、兼ね聴きて、下を納るれば、則ち、貴臣、擁蔽することを得ずして、下情、必ず、上達することを得るなり。」

これが、本日のお話のベースでございます。

そこで、お話は自然に、今、最大の問題でございますソビエト、もはやソビエトはございませんが、共産党の解体、解党、ソ連邦の消滅、ゴルバチョフの失脚というテーマに移ってゆくわけでございます。ここでお話は二つ。ソビエトについては二つ、共産党の解党とソ連邦の消滅ということが一つのテーマ。もう一つのテーマはゴルバチョフの失脚ということでございます。

共産党の解党を現象せしめたものは何であるか。いろんな最近の出ております際物的書物を読みますと、皆、おもしろそうに書いてあります。それは、八月クーデターである。八月のクーデター。つまり、副大統領以下ですね。以下八人のものが徒党を組んだ。しかも、ゴルバチョフ直下の者達です。副大統領以下、内閣の首相、国防相、KGBの長、その他、そういう者達が保守的な立場から、つまり、共産党というものを守っていこうという立場から、今までのゴルバチョフのやり方では、とてもついて行けない、そしてその新連邦条約に署名すべしがせまってくる。

これに署名されては、もはや、共産党その他ソ連邦の政治というものは急変する、極めて激しく変容する。しかも、その変容の方向は自分たちに不利な方向をとる、これは危いと、その新条約承認の調印に抵抗しようというわけで、ゴルバチョフをクリミアの別荘に軟禁して、そして、おれ達が今後の政権を取るんだという、そういう宣言をして、というクーデターですね。そういう保守派の者たちのクーデターというものが、かえって共産党の解党を実現させ、ソ連邦の消滅に

導いたと、——これは、もちろん、これが惹起され、そして、打倒されたことによって、ですが——こういう風に、よく最近のもの本では、際物と言っちゃあかわいそうですし、適当でないけれど、相当な方々が、お書きになっておりますけど。私は、ちよつと、それは、ずうーと、一歩も二歩も引いてですね、遠くから、もう少し眺めた方がいいんじゃないか、という風に思っているわけなんです。

だいたい、近すぎるんです。今日、現在の平成四年、一九九二年の二月十二日という時点が、そもそも近すぎるのであります。

事は、大事件であります。七十四年も続いた共産党、世界中に指令を発し、世界を震撼させた共産党、独裁と専制のスターリンを想い出させるあの共産党、こわい共産党が、なくなっちゃうなんていうことがあるわけですから。そして、先日まで、世界は米ソ二極間の力の均衡によって平和が保たれている、などと言われて、その一極の存在であった、超大国のソ連邦。ソ連の脅威というものは、長らく我が国の安全保障上、重要な意味を持って来ておりました。このソ連邦が全く消滅して、世界政治のなから、その姿を消してしまうなどという、——全く想像すらできなかったことが現実になってしまったのですから。たいへんな出来事であります。“大変”ということばは、この場合に用いて、最も相応しいと申せましょう。

有史以来、今日までの人類の最大の発見は何であるか。コペルニキクスの発見、天動説にかわ

る地動説の提唱である。世界史上、二十世紀における最大の歴史的事件は何であるか。それは、共産党の解体とソ連邦の崩壊である。——こう言えるのか、どうか。なんだか、こう言えそうなきになって来るのが妙であります。

このような大事件のもつ世界史的な意義とか、その発生原因の究明とかは、政治、経済、社会、国民生活、国民意識、学問、芸術、文化などなど、各分野、各方面からの分析、検討、説明が行われ、さらに、そのそれぞれの結果を関連、対比させて、その結論を得る、——こういうプロセスや方法をとることが必要でもあり、また、それが望ましい、と思われませんが、いま、このようなプロセスと方法を経た上での結論を求めるには、本日現在の一九九二年二月十二日という時点では、余りにも、事件の発生の時点に近すぎる、と言えるのではないでしょうか。これらのことの説明は、今後、専門の歴史家の手によって、その正確を期することが、ベターであり、ベストである、と思われれます。

そこで、いま、ここ、この十二日会の席上におきましては、右のような、いわば完全網羅的な行き方から暫く離れまして、普通尋常の社会人がその常識と直感に基づいて、この大変な事態が、かくまでに招来されるに到った由来、原因は、何々であるか、その原因とみられるもののうち、絶対に見落してはならないものは、このAであり、また、このBである、——このような、いわば重点指摘の方法によって捕えたところを、率直にお話して参りたいと存じます。

従って、これは、私がたてている仮説ではございますが、それは、特に申し上げたい点は三つございます。従いまして、当初から、と申しますのは、先月板倉大先輩からお電話を頂いた頃から、この三つの事項は変りがございません。しかし、不思議なことに、と申しますか、当然のことながら、と申しますか、この種の事項は、日時の経過とともに、増加、増殖をいたして参りまして、自由勝手にいたしておきますと始末に困るほどであります。そこで、いわば、俳句の精神、省略の精神でこれらを五つに絞りまして、ここでは、五つの事項だけをあげさせて頂きます。

これは一つのものすごい原因、バックになっておりまして、やっぱりコミュニケーション革命と申しますか、これは、三高の先生で我々の先生でありました鈴木成高先生が、明解に書いておられます。一九〇一年には、マルコニーが、太平洋の無電通信に成功し、一九〇三年には、ライト兄弟が初の飛行に、五九秒二百七十米であるが、しかし、そういうものに成功した。それから、一九〇四年には、フレミングが真空管を発見した。そういうことが起点になって、ダーとコミュニケーション革命が、今、行なわれているんだと言っておられますが、その後、二十世紀の後半になってからも、どんどんこの革命が行なわれて、人工衛星がとんでいる。例えば、アメリカの国防省で、人工衛星から来るテレビを写すと、中国の陸軍が演習しているその兵士の顔まで見えるという時代ですから、宮沢さんが、バンと先だつての国会でアメリカ人の勤労の精神というのは、なっていない、勤労の態度はなっていないという様な発言を、ちよつと不用意にもすると、す

ぐ、その日のうちにアメリカのブッシュは反応して、大統領政府は反応して、あれは問題だと、一つよくお考えを頂きたい。しかし、政治的な問題にはしなひと言つて、翌日には返つて来て、翌々日には、公明党の市川書記長が、国会で、その件について宮沢首相のご見解を問うという様な時代ですから、パツパツパといくわけですね。そういうコミユニケーションの流れ、ラジオ、テレビそれから、そういう人工衛星、通信、そういうものの流れがですね、やはり、共産党の解体、ソ連崩壊のですね、直接の原因ではないけれど、ものすごい局面の展開というものは、そのコミユニケーション革命の進行というものが、負つておるといふことは、これは、否定出来ないわけですね。それによつて、どういふことが起きて来るかといふと、ソビエト、もうソビエトはありませんが、昨年までのソビエト連邦の大衆といふものは、どんどんと西側の生活事情、生活の状況、それから世界一般の世の中に於けるものの考え方、そういうものがですね、どういふ様なものであるかといふことを、どんどん吸収出来るわけですね。そういう大衆の変化が表れる。それから、ゴルバチョフ自身にしたつてですね。新思考外交などといふことを称える様になるのもですね、それは、ゴルバチョフ自身が勉強家ではあつたでしょうけれど、そういう世界の流れといふものが、どんどんタイミングよく入つて来る。おくれて来ない。そういうことで、ソビエトもここでペレストロイカをしなけりゃいかんじやないか、グラスノスチをしなきゃいかんじやないか、という風に彼自身の政策の策定についてもですね。そのコミユニケーション革命という

ものは、影響を与えていると、こういう風に考えていいと思います。そこで第一は、コミニケーション革命の流れであります。第二に何であるか。私はやっぱり他の人は今、余り挙げた人がおられるか、いないか知りませんが、私はゴルバチョフ自身の政策、つまり、ペレストロイカ、グラスノスチ、新思考外交の成功というものが共産党の解党、ソ連邦の消滅というものにですね、ものすごい役割をしているということは、もうはつきり言っているんじゃないかと、これは、大きく評価しなくちゃいけない。彼の歴史的な役割は大であり、彼の世界的貢献は大であるという風に賞讃してやっっているんじゃないかと、私はこう思います。これが二番目にあげられる原因。

三番目。経済政策の立ち遅れ。有効な経済政策がなかなか打ち出されない。国民大衆一般の生活は苦しく、いつまで経っても、少しも改善されない。我が暮らし、楽にならざり、じつと手を見る。共産党の経済テクノラートたちでは、このような有効な経済政策を策定樹立することは無理なのか、ゴルバチョフもそこまで手が回らなかったのか。ともあれ国民の不満は高まるばかりであった。経済面、経済政策面の失敗と言ってもよいであります。

第四としては、国民大衆の意識の変容、変革をあげておくべきであります。第一にあげましたコミニケーション革命の進行、第二のゴルバチョフの進めるグラスノスチ政策の成功、——これらによって、国民大衆としても、国の内外にわたる諸情報の入手、獲得が次第に可能と

なり、年月の経過とともに、以前、——例えば、スターリン時代の如き、——に比して、これが次第に容易になってくる。そこで何が起るか。一つには、ゴルバチョフの提唱するペレストロイカ、新思考外交についての理解とその深化、——こういうものが国民大衆の間に浸透して来る。と、同時に、二つには、〝働けど、働けど、わが暮らし楽にならざり〝自分の経済生活やその水準が、自由諸国家の国民のそれに比較して如何なるものであるか、如何なる程度のものであるか、漠然としてであろうと、正確にであろうと、あるいは、概括的にであろうと、精細にであろうと、これらのことを認識するに到るのであります。

この一と二から、さらに、その三が出て参ります。何であるか。それは、懷疑と批判であります。当初は、政策に対する懷疑と批判であります。次いで、政府・党の機能に対する懷疑と批判であります。さらには、ソ連共産党とソ連邦政府の組織・機能に対するものであり、最終的には、ソ連共産党の存在そのもの、ソ連邦政府の存在そのものに対する懷疑と批判であります。

国民大衆の意識は、そのような懷疑と批判に到達していた、と見るべきであります。

五番目にそこで漸く登場して来るのが、一九九一年八月十九日のクーデターの発生ですね。これだけを共産党の解党に結びつけるのは、非常におもしろい見方ですけれど。その共産党を保持しようとして、クーデターを起したという、そのことが却って共産党の解党を促進し、実現させたのだという見方をされる方は、それは見方としてはおもしろい、読み方としてもおもしろいけ

れども、それだけではないんだと。それは、ややせまい見解で。事は、もっと大きなところ、深いところから由来して来ている、それにこれが加って促進された、とみるべきで、私が申し上げる様な、大づかみに言っても五つの原因はあげてよいのである、こういう風に申し上げたいと思うのであります。そこでソ連邦の方は、わかったと。わかったかどうか知りませんが、私が一生懸命申し上げる事柄についてだけは、わかったと。——こうご理解を頂きたいと存じます。そこで、ゴルバチョフの失脚、これは、失脚と言っていると思うのですが、一九九一年というと昨年でございますが、昨年の四月十六日に彼は、はじめて日本を訪問して、私は、この年の四月十六日というのを極めて明確に記憶して、一生忘れないと思いますのは、実は、ここで私事を申し上げて大変恐縮ですが、私は水泳のクロールというものをですね、ここではじめて覚えましてね、四月十六日、昨年の四月十六日に覚えたてのクロールでもって、二十五米をはじめて泳いだんですが、それが、四月十六日。そこでその日にゴルバチョフさんが来てくれたんだナと。そういう記念すべき日なんです。そこで私は、四月十六日それから、八月十九日のクーデター、それから十二月末のソビエト連邦の崩壊、それから共産党の解党、これ大事件ですね。共産党本部って、あのいやな本部があつて、世界中に指令をとばしていた、それがなくなつたわけですから、世の中、随分明るくなつたですね。その三つの「日」だけをあげてですね、余りにも変り方が早いじゃないかと、それだけの大きな役割をしたゴルビーさんは、どうして失脚してしまった

んだろかなと。これは、信長がいますね。いろんな人がいますね。海部敏樹さんなんか、そういうことになるかならんか、スケールが、少し小さいですけど。私は、ゴルバチョフ失脚の原因というものはですね。これも又、余り沢山挙げると、皆さんお忘れになっちゃうから、さきほどと同様の意味合いで、大づかみに三つだけ挙げておくこととさせて頂きますが、これは、非常に大事なことは、彼自身の政策というものがありますね。この政策が非常にもしろいんですが。ペレストロイカ、グラスノスチ、新思考外交、それは成功の側面を非常に持って、さっき申し上げた様に、世界史の上に、貢献する位の、非常な成功の側面を持っていると同時に、失敗の側面を持っている。成功の側面と失敗の側面があり、そして失敗の側面は即ち民衆の声となつて上つて来るわけですが、その民衆の声をですね、成功の側面が助けてるわけですね。そういう何と言いますか、彼の人相も、非常に注目すべき人相をしていますけど、彼のとつて来た足取りというものは、自分の成功が、自分の失敗を更に、拡大するという作用をすると、ここにですね、彼の失脚の最大の理由があると思いますね。それはどういうことかという、ペレストロイカというのは、即ち再構築、リストラクチャーであるとする、それは、破壊と建設というものを両方やらなくちゃならない。旧体制の破壊ということについて、それは、つまり旧意識の革命ということについては、非常に成功したわけですね、グラスノスチ。もう、みな、報道も自由、言論も自由ということでないか、それは、ものすごく成功した。ところが、建設の方ですね。

建設の方は、即ち、経済政策、自由経済、自由市場経済に移行しようじゃないか、ところが、残念乍ら、ここに一般の建築ならば、それは、中村さんにお聞きしたって、中村さんは、すぐ明解な答を出されると思います。「そりゃあ、君、長坂君、破壊する前には、ちゃんと新しい設計図を、きちんと書いて見積りをして、どういう手順で、こうやっていくか、君、考えておかなきゃダメだよ長坂君、それは、建築学の初歩だよ」と中村さんはおっしゃるに違いない。彼は、ゴルバチョフさんは、中村さん程じゃなかったわけですね。つまり、ペレストロイカくくく、グラスノスチくくく、新思考外交、それはもう大成功をおさめているんだけれど。新しい設計図というものを用意してなかった。あるいは用意してたかも知れないけれど、非常に不完全なものであった。だから混乱が起きた。解体屋としては、彼は成功した。しかし、建築屋さんとしては、中村さんの弟子に入らなきゃならん。設計図を書いて、こうやりなさいと、こう言われなきゃならんのです。こういうことが一つあるわけですね。その今後は設計図を書いたら、どうしてゆくか。高い理想を持ってる人程ですね、高い所へ衛星をとばそうと思う場合程、一段ロケットではダメなんで、米国の宇宙開発、NASAの様に三段ロケット、四段ロケット。——第一段階、第二段階、第三段階、ダーンとこういつて、ああ、種ヶ島成功と、こうなるわけですね。そういう建設面での設計図がなかったこと、その段取り手順について、精密さを欠いたという所に、彼の失敗の最大の原因がある。このように見えて参ります。

彼の失脚の二番目の原因は、八月クーデターを発生させたということですね。発生することを許してしまった。これにも、幾つかの要因ともいふべきものがありましたね。アメリカの大統領ブッシュさんの方から「おい、クーデターが起きるらしいぞ、ゴルバチョフ、気をつけろよ」電話がかかっている。「しかし、いやあ、それは、一応わかるけど、とてもそんなクーデターなど起きる様な情勢でもないし、又、起す様な連中はいないよ」という彼の、さっきも申し上げましたね、隠れたるより現わるるはなく、かすかなるより明らかなるはなし、ということ。このかすかなることに彼が気がつかなかった。それから、さっき申し上げました、太公望がいらないわけですね。周の文王を助けた太公望に等しい様な人物がいなくなつてゆくのですね。シュワルナゼ外相は、ある時期を見て辞任する。これは危ない、彼は、一言の断りもなく、パーンと、大会の真最中に、私は辞任すると言つて去つてゆくわけですね。それは何であるか、皆、わからない。しかし、ゴルバチョフから、これを止めることもできない。このままでは、保守の反動があるということであつたんでしょう。しかし、彼は去つた。続いて、ヤコブレフがですね、共産党を去る。つまり、彼が親しい、親しいと言つていたんでしょう。そういう連中は、ものも言わずに去つていく。そこで、ゴルバチョフは考えなきやいかんわけですね。大統領からも電話があつた。彼らも去つていく。そういうことで、さっき申し上げた、そういう、はつきりシュワレナゼ外相も去り、ヤコブレフも離党する。しかし、その理由は言わない。隠れたるより現わるるはなく、

それをね、彼はピシッとつかまなきやいけなかったと思うんです。と同時にそういう様な、唐の太宗の場合には、魏徴とか、房玄齡（ぼうげんれい）、杜如晦（とじょかい）とか、その他の名臣というものが、そういうものがあるから、唐の太宗も、いい政治が出来るわけですが、彼、ゴルバチョフの場合は、このような人物たちがいなくなってしまうた。親身のものはいなくなる、というわけですね。そういうことが、つまり、八月クーデターを発生させるわけですけども、もう一つは、クーデターも、ろくに出来ない様な連中が、クーデターのやり方を知らない様な連中がですよ、実行しても失敗する様な連中といってもいいんですけど。クーデターも、ろくに出来ない様な程度の連中が、副大統領をやっておったり、首相をやっておったり、K B Gの長をやっておったりですね。つまり、ちよつと落つる連中が彼をとりまいて補佐しておったということです。だから、唐の太宗の逆をいつてるわけですね。明君であるか、暗君であるか、ゴルバチョフが、段々、暗君になっていつてゐるわけです。そういう所に八月クーデターを発生させる。それが第二点であるといえます。

第三番目はですね、彼の失脚の原因はエリツイン。ゴルバチョフとエリツインとはですね、ともに第三高等学校を出ていなかったということ（笑）。これは、何でもないのであつて、もう少し申しますと、三高の先輩と後輩という様な関係にはなかったということです。これは極めて微妙といえますが、エリツインとゴルバチョフとは、これも詳しくお話しすると長くなります

けれど、そういう関係じゃなかった。十二日会の先輩と昭和十四年卒業の中村さんや長坂みたいな関係ではなかった。——十二日会の先輩は温かく後輩に接して下さる。懇切に指導して下さい。私も後輩は先輩に対する尊敬の念や敬愛の気持ちを心の底に深く抱いている。——こういう先輩と後輩との関係、——ゴルバチョフとエリツインとはこのような関係ではなかったということが、ゴルバチョフ失脚の原因でございます。

かつて、ゴルバチョフは、エリツインの政治的立場を失わせる、といってもよいのであります。エリツインを人民代議員大会から追放する、といってもよいのであります。——そのようなきびしい措置を、ゴルバチョフは、エリツインその人に対して講じてしまふ。やむを得なかったことであつたのでありましょうが、エリツインは、これを機に世界一周の旅に出る、そして、やがて立ち直つて、再びソ連・ロシアの政治に参画して来るのではありますが、そのとき受けたひどい仕打ち、——それによつて受けた心の痛み、これは、未だにエリツインの胸の内から消えてはいない。こう言われているのであります。こう言われているなどとこの席上で申し上げては、申し訳れございせんが、いまのところ、ちよつと確かめるすべもございせんので、ご勘弁を頂きたいと存じます。

が、それあらぬか、二人の関係は、微妙な関係にある、いや、それ以上に、意外にひやりとした冷い側面をみせるのであります。

議会の長い廊下の向うから偶々ゴルバチョフが来る、此方からエリツインが行く、二人は、顔をそむけて、すれ違う、——こういう風なんだ、二人の関係は、と、こう言われております。こへ来て、「こゝ言われております」というお話が多くなって、まことに申し訳ございません。二人とも大人物なので、そんなことはないだろう、実際には、そんなことはないのであって、それは、ものの譬え話（たとえばなし）だ、たとえ、ばなしならよくわかる、——このように、私もは先ずは理解しておくべきなのであります。

ともあれ、エリツインによるゴルバチョフの救出、八月クーデターを失敗に終らせたエリツインが、事態を收拾しつつ、ゴルバチョフをクリミアの軟禁から救出する、——このような事象にみられる二人の関係は、一般に、温いものと受けとられて来ていたとみてよいのですが、事態が漸次落ち着いてゆくと、これが、やがて、従来二人の間にあつた微妙な関係、冷い関係に取って替わられて来る、冷い側面の作用が、時の経過、事態の推移とともに、強くなって来る、これがゴルバチョフ失脚の原因である、このように申し上げることができると存じます。

先程、やや飛躍して、いわば比喩的に、この十二日会の先輩の皆様と後輩の私どもとの間の関係のようではなかった、これが原因である、と申し上げましたが、これは、以上のようなことである、とご理解を頂くならば、まことに有難いことと存じます。

以上、概ね、三つのことをあげさせて頂きました。

そこで、もう一人、いま触れましたエリツインにつきまして、申し上げますと、エリツインも、もしもですよ、ゴルバチョフがやって来た通り、彼は、一面、ゴルバチョフの継承者だから、ゴルバチョフも応援するけれど、エリツインもゴルバチョフと同一ようなことを、同じような姿勢、方法、手法でやっていくならば、あるいは、やり続けるならば、彼も、また、同じように失脚する。こういうことができる、こう思われるのであります。政治の原理、あるいは、政治のなかに働く基本原則、こういうものを重くみるのが大切であると思われるのであります。このような視点から、今後のエリツインの動向を注視してゆくならば、何か、見えないものが見えて来る、こう思われるのであります。

ベルリンの壁の崩壊以降、一九九一年十二月末、ソ連の共産党の解体とソ連邦の崩壊をみるまでの間、激変につづく激変、激動につづく激動であります。この激変、激動は、なおも、今後とも、その変動を続けてゆくことでありましょう。

有史以来、今日までの人類の最大の発見は何であるか。コペルニクスによる発見、天動説にかわる地動説の提唱であるとされております。いま、二十世紀における最大の歴史的事件は何であるか、と問われるとき、それは世界共産党の解体とソ連邦の崩壊であるといつてよいのでありましょうか。

激変、激動は、混乱を生み、混乱しつつ、激変、激動してゆく、混乱のなかの激変、激動であ

ります。

このようなときに、「混乱の現代」という恰好のテーマを頂き、暫く、周囲、あたりを見回す機会を与えて頂きました。瞥見したところを、第一には、ソ連はじめ、東欧の混乱、第二には、日本政治の混乱、第三には、日本経済界の混乱、の三部建てとして、いま、この手許のファイルに、それぞれのレジメを用意することができました。

本日は、その第一の部を申し上げるだけで時間が来て仕舞いまして、第二、第三の部は、後日に譲らせて頂きますが、それが却って幸いしてゆっくりしたペースでお話を申し上げることができました。先輩諸賢の前で、やや緊張し、謹んでお話し申し上げた心算ですが、何分にも、この一九九二年二月十二日という時点は、お話の対象となっている事態の発生と進展に甚だ近接した時点でございますし、加えて、元来の浅学菲才、事の真相、真因の把握に欠くところ多きを危惧いたしております。この点、今後、先輩諸賢の温かいご叱正をお願い申し上げますとともに、私のこのつたないお話をご熱心にお聞きとり下さいまして、ご清聴まことに有難うございました。

(以上)

(会社相談役・元防衛施設庁次長)